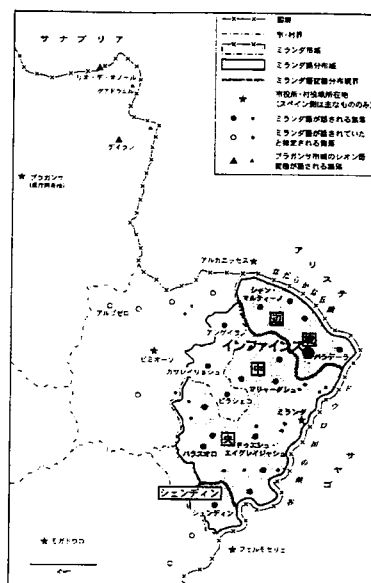


【統一テーマ①】「言語接触の舞台としてのミランダ語 — 語彙分析からのアプローチ —」

寺尾 智史

1. ミランダ語について

ミランダ語は、ポルトガル北東内陸部のブラガンサ Bragança 県内のミランダ地域 Terra(s) de Miranda で話されているイベロ＝ロマンス諸語で、図に示した通り、スペインとの国境線沿いに分布している。話し手の数は、この地域以外に居住する住民の数を合わせて見積もっても二万人は超えない少数言語である。ポルトガル共和国が 1999 年に制定した「ミランダ言語法」により、国家が公認する言語になったが、言語法の実効範囲は地理的にも社会的にも限定されている。系統的にはアストゥリアス・レオン語に属しているが、ポルトガル語やスペイン語との長い期間にわたる接触の影響を受けている。本格的な記述は、ポルトガルの言語学者・民俗学者であったレイテ・デ・ヴァスコンセロシュ J. Leite de Vasconcelos (1858-1941)によって始まる。メネンデス・ピダル R. Menéndez Pidal (1869-1968) はその言語的特徴から、「西部レオン方言」のひとつに位置づけている。ミランダ語内部の言語変種については、図に示したように、「辺境変種」、「中央変種」、「シェンディン（南部）変種」の3つが立てられる。従来から記述の対象になっていたのは、中央変種のドウエシュ・エイグレイヤシュ Dues Igreijas (ポルトガル語 Duas Igrejas) の言葉であるが、特に言語学的あるいは社会的な意味があるわけではない。



2. 語彙分析とその結果

モイゼス・ピレスによる『ミランダ語・ポルトガル語小語彙集』(Pires 2004) の見出し語を分析対象とした。同書は 559 ページほどの、見出し語数約 11,000 の小辞典である。編者のモイゼス・ピレスは 1920 年代初頭にミランダ市域内のインファインス Infainç 集落 (ポルトガル語でイファネシュ Ifanes) で生まれた聖職者である。このため『語彙集』は、編者の母語である「辺境変種」の語彙が中心になっているが、他の変種の語彙も広く収録されている。ここでは、ミランダ語の特徴として挙げられる語形 L->Lh-, E-/I->Ei-, O-/U->Ou- に関わる、見出し項目 L, E および I, O および U を分析する。

(1) 語頭の L-

『語彙集』で見出し語の語頭が L-となっている語彙は 466 で、そのうち Lh-の語形を取るものは 296 例、

63.5 パーセントを占める。また、ひとつの語彙で L-/Lh-の二形とも見出し語として挙げられているのは、次の10組に限られる：ladron/lhadron (泥棒)、ladroneira/lhadroneira (女泥棒)、lambada/lhambada (ビンタ)、lambon/lhanbon (大食漢)、lambona/lhambona (女性の太飯喰らい)、larica/lharaita (空腹)、lembra-me/lhembra-me (私は覚えている)、lion/lhion (ライオン)、liona/lhiona (雌ライオン)、lucifer/lhucifer (魔王)。

また、Lh-の語形を伴わない語彙は、Lampion (ランプ)、Lecre (扇子)、Legibre (文字が読める)、Legal (法的な)、Legion (軍団)、Lei (法)、Letra (文字)、Libra (リブラ：貨幣単位)、Limon (レモン)、Lindo (美しい)、Lomear (<Nomear；名付ける)、Loreiro (月桂樹)、Louja (店)、Luxo (豪華な) などである。

### (2) 語頭のE-およびI-

語頭がE-となっている語彙は238、I-は53で、その合計は291である。一方、語頭がEi-となっているのは220で、E-/I-合計の75.6パーセントを占める。E-, I-を語頭に持つ見出し語のうち、I-と合わせてEi-の語形も採録されている語彙は *Infainç / Einfainç / Einfanheç* のみであるが、これは編者の出身地イファインス集落を指す地名である。一方、第一音節にアクセントのない語彙で、Ei-の語形を伴わない形のみ示されている語彙は、*Ibéria* (イベリア)、*Isquero* (ライター)、*Israel* (イスラエル)、*Istituto* (協会) 等わずかである。

### (3) O-およびU-

本書における見出し語の語頭がO-となっている語彙は263、U-は78で、その合計は341である。一方、語頭がOu-となっているのは202で、O-/U- 合計の59.2パーセントを占める。O-, U-を語頭に持つ見出し語のうち、Ou-の語形とO-/U-の語形の双方が採録されている語彙は次の7組であった：*obeiro/oubeiro* (卵巣)、*obreiro/oubreiro* (職人)、*olhar/oulhar* (見る)、*olor/oulor* (におい)、*oloroso/ouloroso* (においのする)、*urbano/ourbano* (都会の)、*utilizar/outelizar* (利用する)。一方、第一音節にアクセントのない語彙で、Ou-の語形を伴わない形のみ示されている語彙は皆無である。

## 3. 考察

ミランダ語がアストゥリアス=レオン語の変種と分類されてきた根拠の一つである語頭のLh [j]- <L-が、主に近代国家がもたらした制度に関連する語彙には伴わない傾向が強く、これに対し、ミランダ語独特の特徴とされるEi- >E-/I-, Ou- >O-/U- に関しては、この現象を引き起こさない、語頭にアクセントが置かれる例 (*Erro, Isto, Ócalos, Unha, Uólho* など) を除けば、*Eiducaçon* や *Ounibersidade* など、ポルトガル語起源の近代国家がもたらした制度に伴う語彙も含め、ほとんどがミランダ語の特徴とされる形態で発音されることがわかる。また、この条件が当てはまりポルトガル語域と共通する語頭語形のみを残す語彙は、E-/I- ではI-のみで地名、現代語、学術語に当てはまるものがわずかに見える一方、O-/U-に関しては見当たらない。これは、言語接触によって流入してくる近隣言語の語彙を取り入れ、定着させる際に、ミランダ語のLh-は、その形態を変化させる音韻変化がすでに終了していると考えられる一方、Ei-/Ou-に関しては、音韻変化が残存しており、特にOu-に関してはその傾向が強いと考えられる。

Menéndez Pidal, Ramón (1906, 2006<sup>2</sup>). *El dialecto leonés*. León: El Búho Viajero.

Pires, Moisés (2004). *Pequeno Vocabulário mirandês-português*. Miranda do Douro: Câmara Municipal de Miranda do Douro

Vasconcelos, José Leite de (1900/1901). *Estudos de philologia mirandesa, Vol. I, II*. Lisboa: Imprensa Nacional.

(統一テーマ発表要旨)

【統一テーマ⑤】「ルーマニア語とスラヴ語 —ルーマニア語における言語接触—」

直野 敦

ルーマニア語の形成過程で数世紀にわたりこの言語に影響を与え続けてきたのは、中世の南スラヴ語である。ところが、どの現象をスラヴ語の影響とするかは研究者の意見が必ずしも一致しない。ルーマニア語の変化を説明するために次の4つの考え方があるが、特定の現象をそのどれによるかとするかについては議論がある。

- ①ラテン語からルーマニア語へ変化していくなかで内部的に生じた変化とする説。
- ②基層言語であるトラキア・ダキア語の影響で、ラテン語に入り込んだ現象とする説。
- ③バルカン半島における言語同盟という、いわゆる言語圏現象によるとする説。
- ④スラヴ語の影響によるとする説。

現在のルーマニア語が接する言語のほとんどは、ハンガリー語とトルコ語を除いて印欧語系である。しかし、ローマ帝国以前の古代の言語状況は異なり、大まかに、旧ユーゴのアルバニアにかけての地域にイリュリア語、その南方、現在のブルガリアとルーマニアにあたる地域はトラキア・ダキア語、そして紀元前146年にローマに征服されたマケドニアには、おそらくギリシア語に近かったであろう古代のマケドニア語が分布していたと考えられる。ローマの支配は、紀元101年から106年にトラヤヌス帝がダキアを征服し、アウレリアヌス帝の時代の紀元271年にダキアから撤退するまでの約200年間であり、この間、ローマの植民によってラテン語が根付くことになる。その後、5世紀末から6世紀にかけて、現在のウクライナ西部からポーランドの南のあたりの地域から幾たびにもわたってスラヴ人が大量に流入することになる。このうちダキアにやってきたのは東よりのルートを取った南スラヴ人のグループである。ギリシアやエーゲ海の島々にも地名などの痕跡を残しているのかつては相当広く分布していたと考えられる。11、12世紀までルーマニア人は歴史に姿を現さないが、この6世紀から12世紀までダキア・ルーマニア人と南スラヴ人の長い期間にわたる共生、あるいは混住の状態が続いていたものと考えられる。この結果、語彙や文法などに相当の影響を認めることが出来るが、スラヴ語は、後からやってきてその地域に広がったという意味では、ラテン語から派生したルーマニア語にとって「上層」ということになるが、実際には長い期間にわたって影響しあった関係である。

ルーマニア語に対するバルカン半島の古代の言語からの影響として、古代のイリュリア語から派生したと考えられているアルバニア語とルーマニア語との間に約80から100程度の語彙が共通しているため、これを基層言語の影響と見る考え方がある。以下のような例である。

【バルカン半島の基層言語の影響】

語彙：balaur 「竜」 baltă 「沼」 barză 「鶴 (アルバニア語では「白い」という形容詞)」  
a bucura 「喜ばせる」 buză 「唇」 brâu 「腰帯」

接尾辞の -ză, -esc

地名 : Argeș, Mureș, Timiș

音声 : kt > pt : pectus > piept 「胸」 nocte > noapte 「夜」

母音間の l > r : sole > soare 「太陽」

二重母音化 : o > oa, e > ea : sera > seară, bucuros > bucuraoasă

ルーマニア語とスラヴ語は、6世紀から12世紀頃までの間、ドナウ川の南北ではほぼ二言語使用の状態を保っていたものと考えられる。ルーマニア語が、ドナウ川の南の地域にも分布していたことは、ルーマニア語の方言とされるイストリア・ルーマニア語が現在のクロアチアにあたる地域に、またメグレノ・ルーマニア語やア・ルーマニア語がギリシャ北部に残っていたことから知られる。これらの方言は20世紀初頭にはかなりの話し手人口を擁していたものの、現在ではほとんど消滅しているか、消滅寸前である。私個人は、1980年代にギリシャ北部のメツボーという町に残っていたア・ルーマニア語の話し手と接触したことがある。

12世紀から近代にかけての時代にドナウ川の北ではルーマニア語が、南では南スラヴ語が残ることになったが、ルーマニア語は南スラヴ語からの影響を多く被っている。以下のような例が挙げられる。

#### 【ルーマニア語における南スラヴ語の影響】

##### ①語彙

###### i) 名詞

(社会) boier 「地主」 rob 「奴隷」 stăpân 「主人」 slugă 「召使」

(家族) babă 「老婆」 maică 「母親」 nevastă 「妻」 rudă 「親類」

(身体) gât 「首」 stomac 「胃」

(軍事) război 「戦争」 pușcă 「銃」

(時間) ceas 「時刻、時間」 veac 「世紀、年月」 vreme 「時刻、天候」

[ラテン系の単語では oră 「時刻」、timp 「時間、天候」がある。]

(その他) ciocan 「ハンマー」 clopot 「鐘」 coasă 「鎌」 grădină 「庭」 ogradă 「畑」

oțet 「酢」 brazdă 「畝」 plug 「鋤」 boală 「病気」 nisip 「砂」

sfânt 「聖人、神聖な」 Hristos 「キリスト」

###### ii) 形容詞

bogat 「富んだ」 sărac 「貧しい」

###### iii) 動詞

iubi 「愛する」 opri 「止める」 coborî 「下りる」 plăti 「払う」 zâmbi 「微笑する」

trăi 「住む、暮らす」 voi 「望む、欲する」

##### ②音声 : h 音の導入、語頭の e → [je]

③形態論 : 中性名詞の維持、格変化の維持、呼格 (-e (男性)、-o (女性))、数詞、不定法 (短形)、再帰動詞、後置定冠詞、接続法